

『AKIHIKOの会』(略称)発足



兄昭彦が亡くなって後のこと

岡村春彦

兄昭彦が亡くなって八年の間に、昭彦

と関わった裏に沢山の方とのお付き合い

があった。新大久保の病院、青山葬儀場
の告別式、舞阪の漁民葬、安曇野の病院
葬を皮切りにして、「写真展」「岡村昭
彦集」の出版と青年書店主による各地の
ミニ写真展。

武蔵野のお母さんたちの大規模な写真
展から始まり、それを見に来た方の個人
の営為による倉敷・大垣・岐阜の写真展
等。実行委員会方式による名古屋、函館、
札幌、京都のデパートでの写真展。なか
でも京都は昭和天皇の葬儀と重なったが、
むしろ記録的な非常に多くの人々が来場
して写真やビデオの前から立ち去らない
姿が印象的だった。

絶妙なタイミングで開かれたソウル、
大邱での写真展と五周年の東京・小田急
百貨店での写真展。沖縄復帰二〇周年記
念として那覇で開かれた「平和のための
写真展」。

諏訪日赤の看護婦さんたちによる四期
的な「入院案内」や各ゼミの女性たちの
努力によって作られた個性的な「蔵書目
録」。「岡村昭彦発見」の発刊。

蔵書は静岡市立大学の図書館に、ヴェ
トナムの写真二〇点は東京都写真美術館

に納められている。

昭彦の娘二人が住む函館では、九三年
にふたたび写真展が開かれ、市の保存建
造物ともいえる旧ロシア領事館が函館関
係の写真館に生まれ変わり、そこで昭彦
の遺品やカメラなどを恒久的に展示する
計画が有志によって進められている。

そして今度「岡村昭彦の会」が発足し
た。これら全てが、一人一人の「額にあ
る」ボランティアによって成り立ってい
ることを岡村昭彦は冥すべきであり、そ
のような人々と共に生き続けていること
が、昭彦の昭彦たる所以なのだろう。

(おかわら・はるひこ 演出家)

十一月二十八日(日)武蔵野市民文化
会館で、第一回「岡村昭彦の会」が開か
れました。実弟である岡村春彦氏、詩人
の暮尾淳氏、著述・翻訳家である池上正
治氏、批評家の米沢憲氏が別々の角度か
ら、各々の「岡村昭彦」を語りつつ、自
身の取り組みを披露してくれました。
「二十一世紀まであと七年。歴史は岡村
昭彦という人間にどのようなメッセージ
を託していたのでしょうか。今だからこ
そ見えてくるものがあります」と発足の
お知らせに記しましたが、あなたには、
何が見えているのでしょうか。当日の参
加者は六四名。以下そのご報告——。



“われわれはどんな時代に生きているのか”
——彼はいつもそう問いかけていた——

取材の侵攻とラオス軍従続

淳 尾暮

岡村昭彦はその時その場で全力を傾けてさまざまな問題に立ち向かい、出会った人々の心にいまでもホットな言葉を投げかけて去っていった。

私は彼と一九六四年の二月三日に再会した。「南ヴェトナム戦争従軍記」を出す前の岡村だったが、いつ死んでもおかしくないような雰囲気をもっていた。

統従軍記に岡村は、「さよなら、古い、いま一人のアキヒコよ！ おれはもうおまえと一緒に二度とふたたびサイゴン政府軍側から写真をとる気持はないのだ。おれはもっと大きな喜びを知った」と書いた。しかしこの報道のために、五年間の南ヴェトナム入国禁止となった。ケサンに象徴される戦局の大転換の時に、フリーランスとして一度は大新聞社とも拮抗したかのようにみえた岡村が、現場を取材できないのである。岡村はいらだち、あせった。苦悩した。

六七年の五月、私は岡村とタイ、カンボジアに行き、サイゴンに連絡役として入ったが、

解放戦線側から従軍できるという情報は、空振りになった。

その後気を取りなおした岡村は、アイルランド、アメリカ、ピアフラなどへと行動範囲を広げ、世界的な報道写真家への道を歩んでいった。さまざまな現場に立ち、ピアフラのあつけない崩壊も体験した。

入国禁止が解けた岡村は、七一年二月の、報道管制下でのラオス侵攻作戦の失敗をバリエクトに取材し、写真は「ライフ」の表紙を飾った。だが、この時、岡村は機甲部隊などを利用し、サイゴン政府側に従軍した。

統従軍記にある決意と照らし合わせる時、そこに至るまでには、フリーのフォト・ジャーナリストとして、岡村昭彦には、経済的、社会的、思想的に、ある転向と挫折があったろうというのが、私の考えである。もちろんそのことは、人間的成熟にとってマイナスを意味するものではない。岡村は再度の入国禁止処分を受けた。が……。

(くれお・じゅん 詩人)

中国・SF・黄河 池上正治

一週間ほどまえまで、ひとりで黄河のほとりを旅行していました。黄河の中流がはじまる三门峡(さんもんきょう)から、下流域の山東省まで、一月ほどゆっくりと観察をし、取材しました。これは実は、岡村昭彦さんとの出会いの延

長でもあるわけです。

岡村さんと出会ったのは、本のうえでのことを別にすれば、一九八〇年九月のことでした。埼玉県の日高町で友人の笹崎兄弟が「ベトナム戦争からDNAへ」というセミナーを開きました。二日がかり

りのセミナーで、ベトナム戦争後のアメリカ社会の変貌、生命を基軸にすえたバイオエシックス、SFの読みなおし等、ひじょうに多くのことを教えられました。それを契機にして、昭彦さんとはかなり「接近戦」をするように



村昭彦の会



なりました。中国のSFの共同研究や魯迅の会訪中団（岡村昭彦团长）などがあり、舞阪と東京の距離はグッと近いものになりました。

「魯迅の会会報」第四号（一九八一年）「岡村さんを悼む」、「友好とみん」第四〇号（一九九〇年）

岡村昭彦の現在について

— 著書集を読んで —

米沢 慧

そこ、今日は、岡村昭彦の現在とはなんだろう、というように考えて「岡村昭彦集」全六巻を読んできました。感想を整理してみると次の二つになります。

(一) 古典として安心して読むことができるもの。

(二) アクチュアルな課題と向き合っていて緊張を強いられるもの。

前者の代表はいまでは歴史から解放されて、作品になっている「南ヴェトナム戦争従軍記」であり、後者は後期・晩年の仕事「未来の生命のために」「ホスピスへの遠い道」のルポで依然として、「いま」を手探る試行・表現となっています。

〇年）「中国科学幻想小説専号」（拙訳、イザラ書房、一九九〇年）などに、その間のことを部分的に書きました。

昭彦さんの「大陸を知る決め手は川」という指摘は印象的でした。中国でいえば、黄河と長江（揚子江）になるでしょう。中国の歴史をはぐくんできた河川を、人類の産業構造の変遷というSF的な視

界のなかにいれる時、岡村さんのやろうとしていた仕事かほの見えてくるようです。

それは気の遠くなりそうな作業ですが、「いったい何百歳まで生きるつもりなんだー」などという大声も気にしながら、少しずつ実行していくことにします。

（いけがみ・しょうじ 著述・翻訳家）

二、方法的なジャーナリスト

岡村昭彦の思想は近代主義に貫かれていました。その方法的なキーワードをあげると、

① 世界史のしっぽをとらえるー後進国日本の視点（世界史と日本史はない）

② 我々はどんな時代に生きているかー家系のなかでの歴史認識と世界地図のなかの日本（福東）

③ シャッター以前ー近代（後進国日本）資本主義発達史。

これらトライアングルのなかで岡村昭彦のルポは可能でした。近代の往路を貫く視点で、「いま」を捉えようとした極めて方法的なジャーナリストでした。因みに、当時このような方法を持ってない限り日本人がフリーランス国際ジャーナリストとしての足場を掴むことは困難だったにちがいありません。

三、後期・晩年の岡村昭彦の苦闘

たとえば「ホスピスへの遠い道」は模索（先駆的な）の記述に止まっ

ています。一連のルポはカメラマンの文体（シャッター表現）に自らをも被写体として描きこむことで辛うじて成立しています。すでに「シャッター以前ー我々はどんな時代に生きているかー世界史のしっぽ」といった従来の方法では超えられない世界の変容に直面していたのです。私たちはすでに先進国の無意識のなかにあり、社会は新しい未知な段階に入っています。バイオエシックス・ホスピスはその象徴であり生命でした。けれど、岡村昭彦はそうした未知な時代の中心に座るであろう新しい層（民衆像）を「女性・母親・看護婦」というトライアングルのなかに見出したということなのです。この時期以降、彼の仕事は、その周辺で神出鬼没・辻説法のような十数時間にも及ぶ講演・ゼミを繰り返して彼のジャーナリストとしての方法を貫いたのです。

「いままでのように生と死を二分することなく、死を生の一部とする



「岡村昭彦を読む」会(仮)にご参加ください

別掲「岡村昭彦の現在について」の趣旨を背景に、岡村さんの仕事・行動・発言等を追いながら、「私たちはいま、何処にいるのか」を様々な角度から考える—そんな徹底的かつ楽しい勉強会にしたいと思えます。

さしあたり『岡村昭彦集』全6巻をベースにしたテキストクリティック。毎月1回、2~3時間程度。規模はできるだけ小さくして総論から各論へと、持続的な学習活動にしたいと考えています。若い会員の意欲的な参加をお待ちします(テキストコピーは実費)。

担当責任者 米沢 慧*

第1回「予備会合」

とき '94年2月26日(土)午後2時
ところ 東京都千代田区三崎町3-1
倫理研究所8階 第2会議室
(JR水道橋駅西口下車徒歩5分、
TEL03-3264-2254)

参加ご希望の方はアンケート用紙に、とりあえず「参加希望」とご記入の上お送りください。追って(1月末までに)第1回「予備会合」の概要および具体的なテキスト等をお知らせします。

* 米沢 慧(よねざわ・けい)

家族・住居・都市風俗等を中心に批評、評論活動をしている。近著には『事件としての住居』(大和書房)、『ピートたけし』(春秋社)がある。なお「岡村昭彦報道写真集」(講談社)の編集も担当。

参加してみても

自分自身、「会」をつくることに消極的であったことが、一番大きな理由で、呼びかけ人からははずれました。

とりあえず十一月二十八日には参加し、そこでまた考えたいと思っていました。具体的に何をするのか(例えば、「目録をつくる会」のような具体性)がなく、実体はつきりしないものには、あまり積極的になれないという気分です。

参加してみても年に一回ぐらい同窓会というような意味で顔を合わせてもいいのかなと思うようになりました。「目録」がよかったといってくれた方に二名でしたが、会えたことも嬉しいことでした。また、高校一年の時、「南ヴェトナム戦争従軍記」を読んで感動したという二十代の青年にも会いました。

何らかの形で、そういう若い人へつないでいけるような「場」を提供できたらということも感じました。略称「AKIHIKOの会」はどうでしょうか? (宮島安世)

事務局から

一、切手を多めに送ってくださった方が、カンパを送ってくださった方ありがとうございました。ごさいました。

二、本、雑誌、新聞等で「岡村昭彦」を発見したら知らせてください。できればコピーも添えてください。

三、住所変更の折には、事務局への一報も忘れないで。

四、白いファックスを送らないようにご注意ください。

五、次回の集まりは、三月二十四日の命日の前後を予定しています。アンケートの結果から内容を決めます。日程を空けておいてください。

六、その他、呼びかけ人で今後の方針について話し合い、現在、次のようなことを検討中です。

- (一)「AKIHIKO」を、毎年三月二十四日前後に行う
- (二)岡村昭彦発見「シャッター以前」の継続
- (三)「岡村昭彦を読む」会の開催

生き方」と彼は語っていました。たしかなことは、岡村昭彦に近代という往路に対して近代の帰路(=現代)という視点がなかったように、彼の人生もまた、ひたすら往路を生き急いでいったといえます。それだけに晩年のしごと(「岡村昭彦集」五巻・六巻)や講演録は、依然として私たちの前で、現在。として問いかけてきます。

(よねざわ・けい 批評家)

懇親会——飲みかつ談笑

講演会に引き続き行われた懇親会。

遠くはオーストラリア在住の小山真一さん。ラオスから帰ったばかりという竹内正右さん。カメラマンの栗原達明さん。武蔵野のお母さん達の元締め的存在の清水和子さん。大阪の清水栄子さん。目録編纂の功労者宮島安世さん。そして、「ホスピスとか、きれいごと

はいいの。まず平和。私たち平和運動をしているおばさん達を岡村さんは一番好きだった。愛していたのよ。」と会場を沸かせた飯嶋春子さん、などなど。皆さんのお話を聞きながら、飲みかつ談笑。楽しい一時を過ごしました。参加者のつみやきを拾ってみると、

◇岡村さん死んじゃって、それで終わんじゃなかった。

◇インパクト強かったね。とすん。と心に何かが残っている。

◇岡村さんが死んで、皆思い思いの方向を向いて歩き出した。今日の皆は何だか輝いて見える。

◇私はまだ怒っています。勝手にさつさと死んじゃって。早過ぎる!

◇よりまわされてたね。もう一度自分の視点でじっくり勉強したい。

◇サディスティックな人でね。大分いじめられ、しぼられました。

「南ヴェトナム戦争従軍記」を読んで感動したという二十代の青年にも会いました。

発行「岡村昭彦の会」
連絡先「一八〇武蔵野市三軒」一四一〇五六五
TEL03-3264-2254